

可変住居地域

- 多様性に基づいた集住体の研究及び設計 -

Variable Residential Districts

- The research and design of Human Living Values based on diversity -

笠松 大介 (Daisuke Kasamatsu)

Today is the age of individualism. That life style to reduce human community, and considered this problem from twentieth century. At the moment, often found the human connection making by architecture. It can be found it in existing building and competition plan. And these plans try to make an achievement the improvement of Quality of Life, making local community. However, create it based on an abstract idea about human connection. Naturally, it is common that people gather an unspecified large number of people in one architecture. Besides, the cause is unclear it what does connecting people and a person. So, I suppose that it needs to think about what is the meaning of the community, human connection, and what does architecture style that the human connection making by architecture.

1. はじめに

個人主義により人同士が精神的な距離を置いて生活するようになり、それと同時に隣人との希薄な関係、地域内交流の減少が指摘されるようになってから、長い時間が経つ。社会的にも「コミュニティ再生」「地域を元気に」は共通のキーワードである。これについて建築の分野では、住区や集合住宅の形態を工夫することで人の繋がりを生み出し、コミュニティ創造、QOLの向上や地域の活性化を目指している。しかしコミュニティは人間が生み出すものであって、建築はその補助的なものである。建築を塊として考えず、人間の多様な行為に対応して変化する建築が必要ではないか。

2. 目的

本修士設計は人間の多様性を意識し、メタとベタ、両方の目線から人を直接的・感覚的に繋ぐことができる集住体の提案を目的とする。設計までの流れとして、まず社会学的観点から人の繋がりや人のための空間について調査・考察する。そしてその視点を踏まえた上で事例研究を行い、設計を行う事とする。多方面から調査研究していく事で、人間社会の本質を取り入れた設計が可能となると考える。

3. 言葉の意味

本研究では、繋がりに関する言葉について以下

のように意味を定める事とする。

「コネクション」・・・人同士の直接的・間接的・精神的な繋がり。

「コネクティングスペース」・・・コネクションを創ることを目的とした建築空間。

4. 社会学的視点

コネクションを生み出すためには、建築学的のみでなく社会学的な視点も必要となる。ここではゲオルグ・ジンメル(独)、アンリ・ルフェーブル(仏)、パトリック・ゲデス(英)の各理論を調査し、コネクティング・スペースのあり方を考察する。

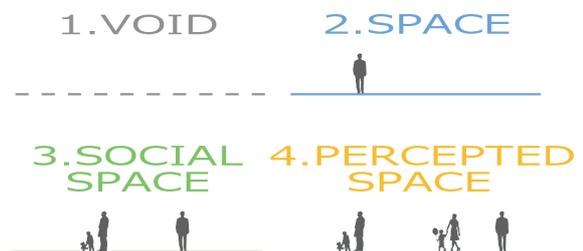


図1:空間の変化

まず空間とは、単なる物質同士の隙間ではない。空間には4つの変化が訪れる(図2)。空洞・空間・社会空間・認識空間の順に変化していく。認識空間は各人によって何らかの場所として空間が認識された状態で、これによって空間は複数の意味を持つ。そのため様々な行為が行われ、

その相互作用によって空間を作り替えたり、空間が人に変化をもたらすもする。また経済性・効率性を考えないで社会の本質を捉えようとすると、社会とは行為の相互作用によって形作られるものである。つまりコネクティング・スペースと人間の多様性、相互作用といったものは、密接不可分の関係である。

5. 事例の分類

コネクションを創るための建築様式は3種類に分類可能である。「活動促進タイプ」(図2)は、地域内活動を促進させるシステムをつくる。

「生活表出タイプ」(図3)は、各住戸と外部の境界を薄くすることで、住戸の閉鎖感を改善する。「複合タイプ」(図4)は2つのタイプを合わせたものとなる。



上_図2: シティア 右_図3: 東雲キャナルコート
下_図4: 板橋ハウジング

しかしこれらの建築の住民アンケートの結果から、世間一般では、多くが活動に参加せず、生活がひらかれる事に不満を持つ事が明らかとなった。一方で、個人の趣味や活動を表に出していく事には興味を持つ人が多い事も判明した。

6. 内向的な住居

事例研究の結果に加え、生活を表に出すことを更に考える。一般的に住居は内向的なものだとされ、建築設計ではそれを外交的に変えることが多い。しかし図6のように住居の変遷を見ていくと、視線的なプライバシーは昔から守られており、生活表出の手法は非現実的であることが分かる。生活空間は内向的で良いものとする。



図5: 住居の仕切りの変遷

7. 考察

社会的・建築学的な見地でコネクションにつ

いて考えた結果、共通して「多様性」「可変性」という2つのキーワードを抽出できる。多様性は人間の意志、個人・集団の活動を指し、これらが表出することでコネクションの生成が促進される。可変性は多様な要素の相互作用によって生まれ、空間を能動的な場所としていく。ここから、コネクションをつくる集住体とは、人の活動が表出しており、相互作用によって物理的・感覚的な変化が起きる事を許容する場所とする必要があると言える。またプライベート空間を外にひらく事が不要であるという点から、コネクティングスペースを既存集住体に挿入するだけでも、コネクションを創る事が可能になるといえる。

8. 空間タイプの考察

2つ目の考察として、集住体はネットワーク型が望ましいと考えられる。この型は中心が至る所に存在し、それらは様々な人達の認識空間となっており、人々は各々が違う中心を持っている。中心は場所ごとに異なる発展を遂げるから、多様・変化の場所となる。しかしセントラルタイプの生活空間は不特定の人に対応するため、多様性を減らし、無難なものを量産しなければならない。コネクティングスペースを集住地域に、ネットワークの様に分設することで多様な中心を造ることができるのではないかと。

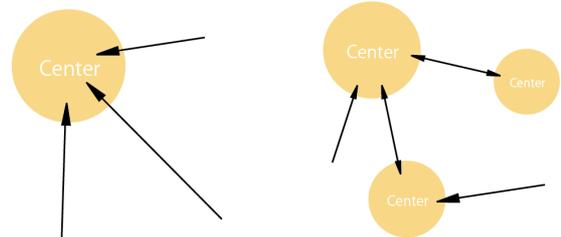


図6: セントラル、ネットワーク

9. 設計ルール決定

これまでの調査・研究・考察を踏まえ、コネクションを生み出す事を目的とした集住体における設計のルールを定める。

- ① 既存住宅地の空き空間を敷地とする。
- ② 分散配置とする。
- ③ 2階以上のスペースを活用する。

10. 設計手法

これら手法により、集住体が多様で可変性のある場所となる。

・ 駐車場上部空間の利用

月極駐車場やマンションの駐車場の上部にコネクティングスペースを造り、地上部はピロティとする事で、ルール①を達成する。既存住宅を

減らさずにコモンを造ることができ、駐車場であるため、定期的な人の交通が見込める。

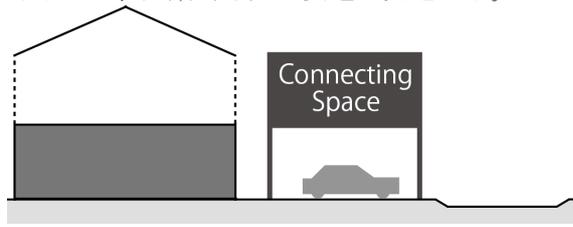


図7：駐車場利用

・既存住宅二階の利用

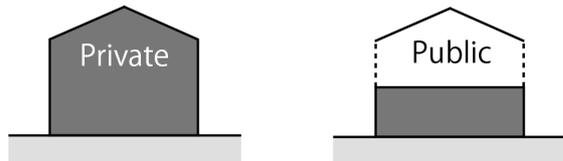


図8：既存住宅利用

一般的な家庭では子供の独立と共に、二階に空き部屋が発生する。既存住宅の二階を外にひらき、様々な活動の場として利用することで、地域に多様性と変化が生み出される。

・接続

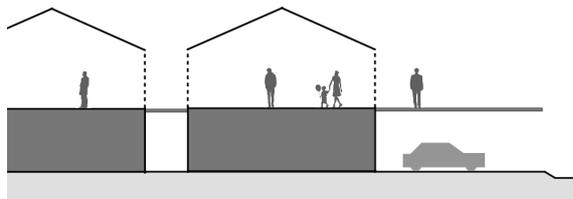


図9：各要素の接続

コネクティング・スペースと開放した二階を接続していくことで、連続性を持つ。接続によって各住宅はプライベートを維持しつつ外部と強く繋がり、またこの場所を移動することで多様な人の行為を目撃する事となる。

11. 敷地

敷地選定条件を「人口密度の高い住居地域である」「現状として、コネクションが生まれるような空間となっていない」、の二点とし、宮城県仙台市泉区地下鉄泉中央駅北東住居エリアを対象とした。第2種住居地域で住宅やマンションが混在し人口密度は高いが、道幅が狭い所が多く、閉塞感を感じる場所となっている。

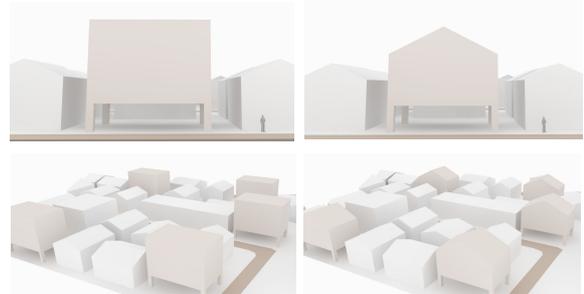


図10：敷地周辺図

12. コネクティングスペースのスタディ

・ボリュームスタディ

住宅地域であるため、周辺環境との調和を第一に考えていく。高さ12m~16mのボリュームで考察したが、陸屋根では存在感が強すぎるが、切妻状とするとそれが和らぐ。敷地が住宅地域なため、ガラスや屋根形状などでボリュームを軽減した形が相応しいと言える。



上_図11：ボリューム高さ14m 下_図12：広範囲に設置する。

・詳細スタディ

地上階の駐車スペースを考慮し、7m×8mのグリッド上に柱を並べる。周辺環境を考え、最小限のスラブを設置する。そして控えめながらもシンボリックな形とした切妻の部分(7m×12mまたは7m×8m)を繋げる。本設計は住居地域を覆う様に建てるため、複雑な形では周辺環境の調和を乱してしまう。また敷地の閉塞感や複雑さを促進する結果となってしまうと判断し、シンプルな外見とした。



図13：コネクティング・スペース スタディ

13. 配置計画

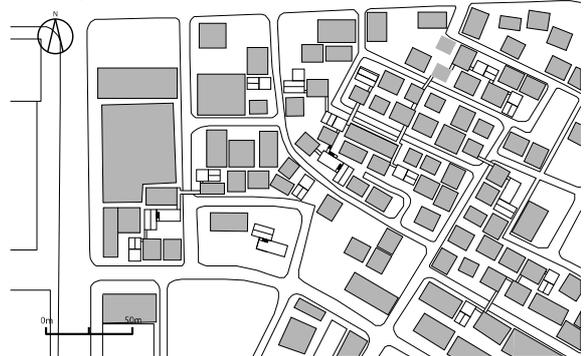


図14：配置計画

駐車場にコネクティングスペースを配置し、周辺の既存住宅の二階と接続する。敷地内の道路幅が狭い事を考慮し、上階が人専用の交通網としても機能するよう駅方向に沿って配置する。

14. 機能計画

・コネクティングスペース



図 15:4階建て

図 16:3階建て

地上をピロティとし、全てのコネクティングスペースが地上、上階どちらからもアクセス可能である。内部について、〈図 16〉は人の交通が多い場所に設置するタイプで2階が商業、3・4階が住戸となっている。〈図 17〉は周囲に住宅が多い場所に設置する。内部は共用空間、個人経営店など、生活空間に合わせたものが入る。

・既存住宅2階



図 17:ギャラリー

図 18:ダイニングデッキ

不必要な諸室を外に開く。用途は園芸、ギャラリー、SOHOや貸し部屋にも対応している。

15. 接続による新しい集住体の出現

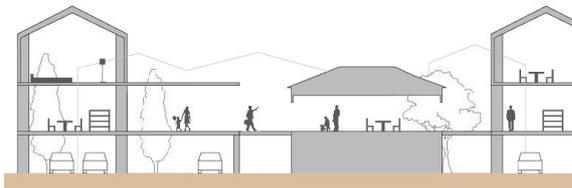


図 19:コネクティングスペースと住宅の接続

コネクティングスペースと住宅2階を通路で接続することで、コネクションを創る集住体が出現する。まず上部通路は駅に向かうための新たな交通網となり、人の流れが発生する。移動する際、コネクティングスペースと住宅2階がランダムに出現し、それら空間は人の相互作用によって創られ、また変化していく。そして日常的に様々な体験をするが、それは活動に参加するといった直接的なものだけではない。ネットワーク型配置や既存住宅利用などにより、行為への参加だけでなく、行為を目撃する事、行為を感じる事も可能な場所となる。それら行為にどの程度関わるかは個々人の自由意志であり、例えば他者と深く関わらない人であっても、興味を惹かれる活動の一つは発見できる。この建築は至る所に、不特定多数の人に刺激を与えるファクターが存在し、またそれらが元となりコネクションを生み出す。

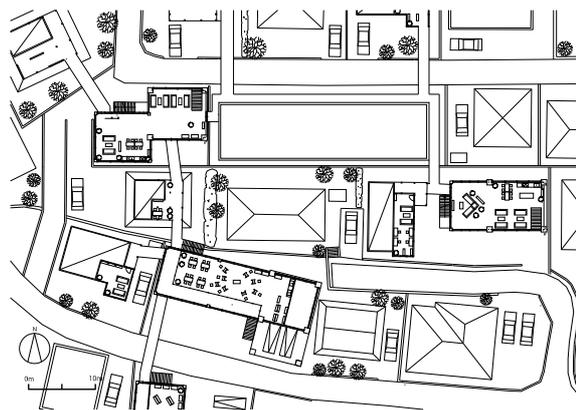


図 20:敷地中央付近 2階平面図

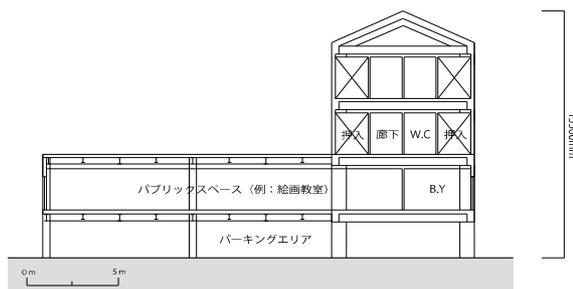


図 21:コネクティングスペース4階建て 南断面図



図 22:模型写真

16. 総括

本設計では、社会学的・都市計画的なベタ的視点から空間や繋がりについて研究・考察し、また事例研究を行うことで、コネクションを創る集住体に必要な要素を定義した。そして集住地域にコネクティングスペースを分散し、既存住宅を利用しながら繋ぐ提案とすることで、多様性・可変性に富んだ、コネクションを創る場とすることができた。人間は多様な思考を持っているから、コネクションを創る建築は多様性と可変性を持ち合わせた物とする必要がある。地域に空間を分散して配置し、住宅2階と接続、さらに交通の場とすることで、様々な相互作用によって変化する建築とした。このように、建築を1つの塊として捉えてしまうのではなく、柔軟で間口の広いものとして捉えることで、人の意志が反映される建築、人に影響を与える建築となり、その様々な影響がコネクションを創り出すのではないだろうか。

11. ゾーニング

敷地内の駐車スペースを、周辺に住居が多いか、商業地域に近いかの2種類にゾーニングしていくことで、場所の特性を求める。

